

■■メールマガジン「静岡県防災」第45号■■

～令和6年能登半島地震（その2）～

「素敵な1年が始まるはずだったのに…」

これは、石川県穴水町の「広報あなみず」2月号の表紙の一文です。

気持ちの上では、多くの方が最もくつろいでいる時間帯に起きた地震ですから、「悪い冗談じゃないか」「現実として受け入れられない」という気持ちになるのも仕方ありません。

静岡県からは、2月26日までに、救出・救助、医療、福祉、行政支援などで、約2,800名が被災地に派遣されており、現在、穴水町において、「災害対策本部の支援」「住まいの被害認定調査」「避難所運営」等の支援を、毎日約40名体制で継続的に実施しています。

派遣された職員は、住まいの耐震化と水・トイレの備蓄の重要性を痛感しており、活動中、トイレに困ったという声も多く寄せられています。

私自身、1月17日から1週間穴水町の支援に入りましたが、当時は役場のトイレは水を流すことができなかつたため、小便でしか利用できず、大便の場合は、凝固剤と新聞紙を使うか、役場前の仮設トイレを利用する必要がありました。

1月20日過ぎにプルートという避難所で水が出て、手を洗うことができたときには感動しました。

また、穴水町は職員が約100人と小さな町であり、職員の皆さんも被災者でありながら、総動員で災害対応にあたっている様子を目の当たりにしました。

自宅が被災し役場に泊まり込みで勤務する方、小さな子どもがいても家に帰れず夜勤明けに続けて日勤をする方、乳児を背負って仕事をする方など様々でした。

基礎自治体である役場が機能しないと、被災者支援も円滑に行えません。

静岡県では県内市町や外部のNPO等と連携しながら、穴水町職員の負担軽減に努めるとともに、被災者支援に協力しているところです。

2月下旬となり、能登半島地震の報道も減ってきた印象がありますが、まだまだ避難生活を余儀なくされている方がたくさんいらっしゃいます。

被災された皆様が少しでも早く落ち着いた生活を送ることができるよう、引き続き支援してまいります。